学校名　世田谷区立桜町小学校

前年度の改善方策について実行した改善結果

◎重点目標１	重点目標	全ての教育活動における探究的な学びを通して、学習を自分事として捉え主体的に学び、高い思考力・判断力・表現力、必要な知識・技能を身に着け、共感・協働する子どもを育てる。 －確かな学力の育成－
	数値による指標	「すすんで自分の考えを伝えようとしている」と自己評価できる児童を８５％以上にする。 「自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある」と答える児童を（５・６年）８５％以上にする。
	結果（１）	○「『すすんで自分の考えを伝えようとしている』と自己評価できる児童を８５％以上にする。」については、１～４年生については９０％を超えているが、５・６年生については８５％に満たなかった。高学年になるにつれて自ら発信する意欲が下がってしまっているという現状がある。「発言する」ということのみに価値を置くのではなく、ロイロノート等に意見を書き出し、それを共有することで自分の意見や考えを伝えていることになるのだということを共通理解していく。一方で「授業では、考えたことを話し合ったり発表し合ったりする機会がある」（５・６年生）については９０％を超えているので、学び合いの場は十分に創出できており、それを児童も実感していることがわかる。今後も、共感・協働の学びにおいて、発言は得意ではないが静かに考えている児童の思いや考えを共有することの重要性を浸透させていく。 ○「『自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある』と答える児童を（５・６年）８５％以上にする。」については、６５．５％と大きく下回った。これは、総合的な学習の時間の単元開発を行い、児童が夢中になって探究する活動を創出することはできたが、そのことが「じぶんの生き方や将来について考える」ということに項目と児童の意識が結びついていないということが考えられる。職業調べや職場体験等の直接的なキャリアに関わる教育活動だけが、キャリア教育ではないことを折に触れ伝えていく必要がある。我々教員が、キャリア教育の４つの視点を意識し、全ての教育活動を捉えなおし、キャリアパスポート等を活用して児童に働きかけていくことが必要である。
重点目標２	重点目標	非認知能力を育成することを通して自尊心をはぐくみ、多様性を認め自他を尊敬することのできる子どもを育てる。 －豊かな人間性の育成－
	数値による指標	「自分には良いところがある」と自己評価できる児童の割合を９０％以上にする。 「誰かの役に立っていると思うことがある」と自己評価できる児童（５・６年）の割合を８０％以上にする。
	結果(２)	○「『自分には良いところがある』と自己評価できる児童の割合を９０％以上にする。」については、１～４年生は９０％を超え、５年生も８８％と９０％近くになっている。高学年になるにつれ、より客観的に自分を見るようになったり、自己批判をするようになったりすることは発達段階の特徴ともいえる。しかし、心理的安全性の高い学級経営を心がけ、子ども同士の共感・協働の場面を学びの必然に応じて創出していくことで、自己有用感や自己肯定感がさらに高まっていくと考えられる。 ○「『誰かの役に立っていると思うことがある』と自己評価できる児童（５・６年）の割合を８０％以上にする。」については、７２．７％であった。これについては、にじいろ班、桜町タイムのあいさつ、クラブや委員会活動等において、高学年が活躍できる場所を創出してきたが、さらに機会を捉え教職員から、認め励ます言葉がけ等を行う必要がある。また、総合的な学習の時間において、地域での体験活動、探究活動が増え、地域の方々から感謝される場面が増えていることは、今後子どもの意識によい影響を及ぼしていくものと考えている。
重点目標３	重点目標	体力の向上を図り、自らの気力を充実させてやり遂げようとする子どもを育てる。 －健やかな身体の育成－
	数値による指標	「体育の授業や外遊びなどで体を動かすことが楽しい」 「マナーを守り、よくかんで落ち着いて給食を食べている」 と自己評価できる児童の割合を９０％以上にする。
	結果（３）	○「体育の授業や外遊びなどで体を動かすことが楽しい」と「マナーを守り、よくかんで落ち着いて給食を食べている」については「わたしは、体力の向上や健康な生活に取り組んでいる」という項目に集約したが、８５％であった。９０％には至らなかったが、おおむね意識できていると考えている。体育の授業は体育主任が中心に用具の充実及び指導方法の共有等が継続的に行われている。生活指導部では、外遊びの推奨を呼び掛けている。今年度は２学期間給食室改修工事のため、お弁当だったが、３学期に給食が再開し、子どもたちは喜びよく食べている。マナー等に関しても大変よいと捉えている。